

ドネシアに滞在し、その後更に1930年にここを訪れて、『熱帯土壌一般殊に東印度の土壌』6巻を1932年に発刊している。戦後 Council of the Royal Tropical Institute, Amsterdam の委嘱をうけて、Utrecht 大学の土壌学教授 F. A. van Baren と共著したのが本書であり、その内容は、熱帯条件下での土壌生成が主要論点になっている。従って土壌の肥沃度、侵蝕、灌排水等の問題についての叙述は、それらが土壌生成に重要な関係をもってこない限り、省略されている。

内容は大別して2部から成る。第1部では熱帯条件下での土壌生成の一般論が展開されており、第2部で展開される土壌生成の個々の場合についての基礎的な側面を覆う。第1部では、気候(第1章, Atmospheric climate and soil climate), 母岩・造岩鉱物とその風化(第2, 3, 4章), 粘土鉱物の生成(第5章), 土壌中の鉱物組成(第6章), 器械的組成と土壌断面の特徴との連関(第7章), 有機物の形成と分解(第8章)がとり扱われている。第2部では熱帯での、殊にインドネシアでの土壌生成へ論旨が展開され(第9, 10, 11章), その他, Lateritic soils, Podzolic soils, Margalitic soils, Other important soil types, Classification of tropical soils についての各章が設けられている。

参考文献は今世紀初頭から1953のものに及び、必要なものは殆んど網羅されている感じである。Atmospheric climate and soil climate, Climate versus rocks, Clay mineral formation, Mineral association in soils, Lateritic soils, Margalitic soils. の各章の文献は充実している。景観、土壌断面、それに岩石の風化状態、土壌の生成の状況等を示す写真が豊富に収録され、記述を助けている。又各地の気象データ、(殊に雨量データ)、母岩、母材、粘土鉱物、土壌断面各層の化学組成を示すデータ、造岩鉱物の種類と量を示すデータ等がとくに目につく。ともかく、熱帯土壌学のこれ迄の業績と、それが現在かかえている問題を知るうえに又熱帯土壌を体系的に学ぶうえに貴重な本である。

土壌研究の場において、著者は一応、自然的概念の立場をとっているが、発想の基本においては、ヨーロッパ流の地質土壌学の傾向が強い。このことは J. van Baren の pedological credo: "In the beginning was the rock, and the rock was the

mother of the soils" に対する著者の強い共感の念として表わされている。著者が水田や畑作地等の土壌、いいかえると、外的因子として更に人為作用の加わってくる耕作地土壌を研究対象として選びたがらない、という姿勢がそこに出てくるように思われる。

土壌学が農業に何を寄与し得たか、又し得るか、という点から、著者が発刊を予告している次巻 *Tropical Soils and Crops* に大きな期待を寄せている。

(古川久雄)

Robert L. Pendleton: *Report to Accompany the Provisional Map of the Soils and Surface Rocks of the Kingdom of Siam*, Bangkok, 1953. Mimeograph. viii + 290p.

Robert L. Pendleton と彼にフィリッピンより同行した Sarat Montrakun は、1935年にタイ国に腰をすえて以来、タイ国の土壌及び岩石の調査に従事し、1946年に土壌図を発表。その後地方レベルでの精査を行い、採取された土壌の化学的・物理的分析、及び肥効試験を Sarot Montrakun が受けもち、漸時蓄積された結果を Mutual Security Agency へ提出する為にまとめたのがこの報告である。土壌分析結果は別に大部の報告書、*Compilation of Chemical Analysis of Soils in Thailand* に収録されている。

この報告書は次の五部から成る：

1. Limitation of the Soil Map, 2. An Annotated Soil Legend, 3. Soil and Fertilizer Studies in Siam, 4. Geographical Material, 5. Principal Topographic Subdivision of Siam. 重要なのは第二部、第五部の二つである。

第二部でタイ国の土壌を22の土壌型に分類し、その母材、地形、土性、植生、耕作形態等を主として述べている。Bangkok dark heavy clay, Ongkarak clay, Chiang Mai loam, Roi Et fine sandy loam 等重要な土壌型については、土壌断面に観察される顕著な現象中植物養分の存否、肥効テストの結果等に簡単に言及している。然し分類単位は soil series 程度のものや great soil group が並列され、又各単位のなかでの分類の区別がさだかでない場合も多い。著者自身、ここで使う土壌型には、その特徴に非常に大きな幅があることを了解してほしい旨述べている。

第五部でタイ国を北部、中央部、東北部、東南部、半島部にわけ、地形、水系、植生、母材、土壌、灌漑、農業等、その叙述は多岐にわたっている。色と土性を示したのみのものではあるけれども土壌断面の記述も多い。中央部、東南部、半島部については既に別に報告書を出しているため、簡単な記述にとどまっているが、北部と東北部については豊富な記述がなされ、殊に東北部については、著者のフィールドノートから、一寸刻みの調査行程間での観察が刻明に書かれており、ほぼ同じコースをかつてジープで走りまわった私にとっては非常に興味深い。

この報告から我々が知り得るものは要約すれば次の2点になるだろう。

- 1 タイ国における土壌の調査・分類のこれまでの成果
- 2 この分類にもとづいた土壌型と土地利用の関係の概要。

なお、この報告を縮小再編した小冊子 (Robert L. Pendleton & Sarot Montrakun: *The Soils of Thailand*, 22p.) が1960年に出版されている。

著者の興味のポイントが土地利用の面にかたむいている為に、土壌の生成、分類、肥沃度といった土壌学自体の面での掘り下げが行われていないのは当然かもしれないが残念だ。この報告書を私にくれた Mr. Sarot Montrakun は温顔をほころばせて言ったものだ、ペドロロジーはエダフロロジーに奉仕すべきなのだ、と。

(古川久雄)

Александр А. Губер: *Библиография юго-восточной Азии. Дореволюционная и советская литература на русском языке оригинальная и переводная. Издательство восточной литературы, Москва, 1960. 212p.*

本書は1964年4月24日京都大学を訪問したモスクワ大学教授アレクサンドル・А. グーベル博士から京都大学東南アジア研究センターに寄贈されたものである。グーベル教授はインドネシア、ベトナムをはじめ東南アジア全域にわたる著書や論文を多数執筆しており、ソ連における東南アジア研究の最高権威の一人

である。本書の編集は、A. M. Grishina を中心に、M. I. Nefedov, D. A. Birman, S. M. Makarova, M. A. Lobyntseva, V. A. Kozhevnikov, V. I. Iskol'dskij, G. A. Andreev, Ju. G. Aleksandrov, S. I. Ioanisjan, A. M. Shil'kov および V. I. Kornev ら12人のソ連学者によって行なわれた。

本文212頁の本書には3,752の文献があがっている。本書の構成は、12章に分かれ第1章は、(1) マルクス・レーニン主義の創始者たちが東南アジアについて書いた文献、(2) ソ連政府および党の東南アジアに関する刊行物、(3) 文献目録、(4) ソ連における東南アジア諸国の研究史、(5) 東南アジア諸国に関する一般文献および、(6) 地理、(7) 人種、(8) 歴史、(9) 経済、(10) 文化、(11) 言語、(12) 宗教に関する文献を掲げている。

第2章以下はロシア語のアルファベット順で地域別に分かれており、第2章 ビルマ、第3章 英領北ボルネオ、第4章 ベトナム、第5章 インドネシア、第6章 カンボジア、第7章 ラオス、第8章 マラヤとシンガポール、第9章 サラワク、第10章 タイ、第11章 ティモール、第12章 フィリピンとなっている。地域別文献の量によって、ソ連における研究の関心がどの地域に向けられているかがほぼ推察できる。すなわち、最も文献が多いのはインドネシアの884とベトナムの846とであって、他はずっと少なく、ビルマの324、マラヤおよびシンガポールの252、フィリピンの222、タイの142という順になっている。ソ連の研究がインドネシアとベトナムとに集中されていることは、色々な意味で興味深い。政治的に不安定で、ソ連の対外政策にとって重要な国々ほど、ソ連の研究者の関心をひいているといってもいいすぎではなかろう。1950年代末までに発表されたソ連の東南アジア関係の研究が一望の下に見渡せるという点で、本書はきわめて有益な文献目録である。グーベル教授の御好意と、教授をセンターに紹介された、京都大学人文科学研究所貝塚教授および日比野助教授の御高配に心から感謝し、京都大学東南アジア研究センターが今後国際的な学術交流に寄与することを祈念したい。

(猪木正道)